All Rikkyo Tennis

立教大学体育会庭球部部報

発行所
立教大学体育会テニス部
〒171　豊島区西池袋３丁目
電話　(3985) 2680
発行人　大熊隆史
　　星野　薫

躍進２部昇格（女子）、無念３部残留（男子）

頑張ろう立教テニス部

テニス部部長　栗原　謙二

テニス部の男子と女子が合併して二年目のシーズンになりました。この間、両者が協力して一緒に活動する機会が徐々に増えて、部の体制や運営が良い方向に進んでいると見ております。毎年秋に行われる立教学院庭球部合同練習会では、初めて大学女子も参加して行われ、小中高の部員が例年とは違った体験と感想を持ったようでした。

念願の関東学生リーグ戦における二部昇格の目標は、女子が見事成しとげ、その素晴らしい成果に心より喜んでいます。男子は三部残留となりましたが、よく頑張ったと思います。明立定期戦には久しぶりに勝ちました。

来年のリーグ戦とその他の部活動においてテニス部の男女とも頑張ってください。先輩の皆様方のご指導をよろしくお願い申し上げます。

テニス部の更なる発展と充実を

テニス部副部長　舟田　正之

男子部と女子部が一緒になって、2年目になりますが、ときどき女子の練習を見ると、男子が一緒に参加していることもあり、大変結構なことだと思います。

立教大学は、来年（一九九八年度）から2新学部が発足致し、新座キャンパスも拡充され、また学生数も若干増加します。

これら2新学部と従来からの法学部・理学部と併せて、少しずつ自由選抜入試の枠が広がりつつあり、テニス部もこれにより、力のある学生が増え、ますます向上することを期待致します。しかし同時に、学校の部活動一般がそうですが、プロの集団と違って、多様な力の学生がみんなで一緒になって練習し、力をつけて試合をすること自体に意味があるということも指摘しておきたいと思います。

永続的強化策を

テニス部ＯＢ会会長　岸本　駿二

男子女子共に二部への昇格を目指した今年のリーグ戦、男子は僅差で三部残留となりましたが、女子は創部以来初の二部昇格の栄誉を勝ち取りました。誠に喜こばしい限りです。

両チームの監督・コーチはじめ直接指導に当ったＯＢ・ＯＧの皆様に心から感謝を表します。

男子チーム強化については、長期永続的施策が望まれるところで、小中高大の一貫教育の利点を生かすのが最も現実的で実行可能なものと考えます。

今夏、立教中学が全国中学生テニス選手権大会団体戦で全国優勝の快挙を成し遂げましたが、その栄冠の陰に現役学生やＯＢの熱心な指導があったと聞きます。この様な活動が日常化されてこそ、強固な裾野の頂点に大学テニス部が立つという理想的な姿が可能となるのでしょう。

ＯＢの皆様のご指導ご支援をお願い申し上げます。

２部昇格おめでとう

テニス部ＯＢ会副会長　八木下紗絵子

三部から二部への入替え戦を久しぶりに応援に出掛けた。

その日は、まぶしい程太陽が輝き、とてもさわやかな日であった。それにも増して、現役達のすがすがしい態度に感銘を受けた。

今の若者は楽ばかり考え、自由気ままな生活を好み、あいさつも出来ない人達が多い世の中で、ひとにぎりでもいい、健全な精神と忍耐力が宿っている学生達に接し、とても気持ちの良い一日を過ごすことが出来た。

その上、二部に昇格出来満足感でいっぱいでした。せっかくこの様な素晴しい後輩達が活躍しているのに応援が少いので、どうぞＯＢ、ＯＧの皆様、応援をよろしくお願い致します。

「部の繁栄と存続の為に、テニス仲間を増やそう」

テニス部ＯＢ会理事長　豊田　資朗

昨年8年振りに3部に返り咲き、勢いに乗る男子は部員数わずか16名で、3部リーグ戦に臨んだ。3部校は特にダブルスのレベルが高く、ネットプレーは4部校とは格段の差があった。

当校は昨年リーグ戦を経験した4年生5人に2年生1人がレギュラーメンバーに加わった。

戦積は惜しくもポイント差による第3位で、大いに健闘したが、2部入替戦に臨めなかった。しかし鷲田監督の年間を通じての熱心な指導の結果、技術面で大きな成果を残し、又心の面でも大きく成長した一年であった。

ここ2、3年テニス部への入部は平均4～5人で全体で20名に届かない構成人員である。来年6人の4年生が卒業すると、部員数は12名になり、6人の卒業生の内5人がレギュラーとして出場していたので、来年のリーグ戦では大苦戦を強いられる。

新入生獲得の為に今から手を尽す必要がある。

一般的に大学新入生の考え方は、大学4年間を部活を通じて、友人を増やし、充実した学生生活を送ろうと考えている。

とりわけ高校時代にテニス部で活動していても、ほとんどがサークルに入り、体育会に入部して来ないのが現状である。

テニスだけに時間を拘束されるのを嫌うのが原因なのか、あるいは授業と両立出来ないからという不安が原因なのかもしれない。特に一般学生の入部が少ない理由は我々サイドで入部しやすい環境作りを怠っているからに他ならないと思う。

今からでも遅くない。現役・ＯＢを含めて、入部しやすい環境と機会を早急に考える必要があると思う。

ただ漫然と手を打つことなく眺めていても、部員を増やすことは出来ない。現役・ＯＢ共に危機感を持ち、部の繁栄と存続の為に立ちあがろう。

平成９年度リーグ戦報告

男子監督　鷲田　典之

今年のリーグ戦は、残念ながらあと一歩およばず、三部リーグ三位となり二部との入替戦に出場する事ができませんでした。

結果は次の通りです。

第一戦　対上武大（5対4）
第二戦　対帝京大（6対3）
第三戦　対東農大（4対5）
第四戦　対順天大（7対2）
第五戦　対日体大（4対5）

戦前の予想では、混戦だが立教にも十分チャンスがあり、その中ではやや上武、帝京が手強いのではないかと思っていました。蓋をあけてみると、その両校に第一戦、第2戦と当たり勝つ事ができ、更に残る三校のうち第四戦の順天大には勝てる見込みが強かったので、第三戦の東農大戦に勝てば二部との入替戦にはいけると、大きな期待を持って臨みました。しかし、ダブルスは2対1でリードしたものの、4対4となりＮＯ・1シングルスに勝負がかかり、ファーストセットを取ったものの、ファイナルセットで敗れ、結局4対5となってしまいました。それでも、最終戦の日体大戦に勝てば入替戦には出場できるという混戦だったのですが、ダブルスで1対2、シングルスで3対3となり、4対5で敗れてしまいました。日体大戦の当日は、朝雨が残っていましたが昼前から雨があがり、新座キャンパスのハードコートに移って試合を行い、ダブルスとシングルス四試合を行い、残り二試合は翌日に順延となりました。初日の終了時点で2対5と勝敗は決定していましたが、翌日のシングルスで村木、粂田が二勝してくれたのは立派でした。結局、あと1ポイント足りず二部三位となり、今年のリーグ戦は終了しました。

今年は、レギュラーのほとんどが四年生で、村木、粂田をはじめ岡・吉崎は、リーグ戦経験も豊富で下級生の頃からリーグ戦の勝利に貢献してくれた者達でした。その意味からも、四年生の時に是非二部に昇格して卒業してもらいたかったのですが、接戦をものにできなかったのは、私の指導不足、采配ミスによるものでした。誌面をお借りしてお詫び致します。

来年度は、レギュラーの中心だった四年生が抜ける為大変厳しい状況ですが、四年生はリーグ戦終了後も後輩の指導の為に練習に参加してくれており、その結果、若手も徐々に力をつけてきております。今後、高田主将を中心に一丸となって練習に励み、リーグ戦に臨みますので、今後共ＯＢ諸先輩の御指導御鞭撻をお願い申しあげます。

98年に向けて

女子監督　広瀬　省蔵

本年度は幸にも2部昇格をはたし、女子部にとってはかつて無い好成績であったと思います。これは優秀な選手が入ってきて自力がついてきたこと、またそれにひっぱられ他の選手も上達し志気も上ったこと、男子部と一緒になり、良い意味で競争しお互い厳しい目で部活に取り組んでいること、諸先輩の多大な応援、御支援があったおかげだと思います。

個人戦においてもまずまずの成績であったと思いますが、来年2部での戦いは、かなり厳しいものと思われます。第一にハードコートでの練習、第二に上部校との対戦、第三に体力、精神面の強化、第四に練習方法の工夫等。今一度気を引きしめ各々が何をすべきかをはっきり決めて最強のチーム造りで1部に挑戦したいと思います。

もちろん強くなり勝つ事が目的ではありますが、それだけでなく男子部とも協力しあって明るい部にしてゆく事も含めて頑張って行きたいと思います。益々の御支援のほどよろしくお願い致します。

平成九年度 関東大学テニスリーグ リーグ戦結果

男子　３部リーグ結果

	上武大学	順天堂大学	帝京大学	日本体育大学	東京農業大学	立教大学	勝点	勝ポイント	失セット	順位
上武大学		8−1	3−6	6−3	7−2	4−5	3	28	39	2
順天堂大学	1−8		3−6	3−6	1−8	1−8	0	9	76	6
帝京大学	6−3	6−3		5−4	4−5	3−6	3	24	46	4
日本体育大学	3−6	6−3	4−5		4−5	5−4	2	22	48	5
東京農業大学	2−7	8−1	5−4	5−4		5−4	4	25	53	1
立教大学	5−4	8−1	6−3	4−5	4−5		3	27	41	3

女子　３部リーグ結果

	上智大	聖心女子大	玉川大	東京学芸大	立教大	成蹊大	勝点	勝ポイント	失セット	順位
上智大		7−0	7−0	4−3	1−6	5−2	4	24	28	2
聖心女子大	0−7		5−2	0−7	1−6	2−5	1	8	57	5
玉川大	0−7	2−5		0−7	1−6	2−5	0	5	60	6
東京学芸大	3−4	7−0	7−0		0−7	4−3	3	21	30	3
立教大	6−1	6−1	6−1	7−0		6−1	5	31	10	1
成蹊大	2−5	5−2	5−2	3−4	1−6		2	16	41	4

女子　２部入替戦

学習院大学 VS 立教大学

複	No.1		河野・林	2−6　3−6	畠中・岩本	○
	2		山田・山田	1−6　3−6	山崎・尾又	○
単	No.1		山田彩子	0−6　2−6	畠中暁子	○
	2		早川有紀	2−6　2−6	尾又明日香	○
	3		河野彩	1−6　4−6	山崎真由美	○
	4		林優希	3−6　1−6	岩本美幸	○
	5		山田絵里子	6−7 (7)　3−6	増田ちえり	○

14　0 { 複 0−2 / 単 0−5 } 7　0

リーグ戦を振り返って

リーグ戦を終えて

男子主将　村木　祐介

小雨の降りしきる中、日体大との今年度リーグ戦の最終戦が、富士見から新座へと場所を移し行われることとなった。勝てば３部優勝が決定的である。しかし、その気持ちから選手達は平常心を失ってしまったのかもしれない。気持ちと肉体の歯車がかみ合わないまま、気づいてみるとシングルス№３が終わった時点で２対５。我々の最終戦の負けは決まってしまった。しかし、まだリーグ戦は終わってはいない。私はそう信じて翌日の試合を迎えた。

――３部昇格を果たした昨年度のリーグ戦を終えてから、「２部昇格」という目標を達成すべく、阿部さんからバトンを受け取り、日々練習を重ねてきた。思い起こせば、高校３年の冬から富士見のテニスコートでどのくらいの時を過ごしたのだろうか。何球ボールを打ったのだろうか。どのくらいの汗を流したのだろうか。全く想像はできない。ただ一つ言えるのは、それらが今の自分を作り上げてきたのだということだけである。この４年間の中で、どれだけ自分が成長できたか分からないが、こうした生活があったからこそ今の自分がいるのだ。

最後のリーグは勝つことの喜びと難しさを覚えさせられた。劣勢をはねかえし勝利した上武大戦、全員で勝利した帝京大戦、そして、足元をすくわれた東農大戦。この最後の一ケ月に一番自分は成長した気がする。今まで打ったボール、流した汗、それは「努力」の２文字に象徴されるものであり、それは誰にでもある才能であると私は思うことができた。――

日体大との試合は結局４−５となり、上武大の結果によっては、２位の可能性がある。私は皆の『リーグはまだ終わっていない』という「魂」と共に、その結果を待った。電話が鳴る。我々のリーグ戦は終わった。しかし、私の魂は未だにコートに残っている。後輩達にはその魂を伝えて行きたい。そして努力する才能を惜しみなく使って欲しい。人間やればできるのだ。

最後になりましたが、鷲田監督、藤井・山田両コーチをはじめ、夏合宿を支えて下さった中島さん。合宿に参加して下さった有馬さん。そしてあらゆる面からチームを支えて下さった、岸本会長、豊田理事長、浅見強化委員長、又、中学時代御指導して下さった鷲見さん、小田さん、皆様の支えがあったからこそのテニス部生活であったと思います。本当に有難うございました。

リーグ戦を振り返って

女子主将　吉田　涼

本当に早いもので、あの四月、リーグ戦の一ケ月から半年も経ったのだと、この原稿に向かいつつ、驚いてしまいました。私は今後、何年が過ぎようとも、あの一ケ月を忘れることはないだろうと思います。

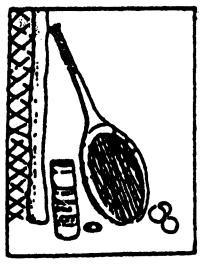
私と星野が硬式テニス部、女子の幹部を引き継いだのは、昨年の六月でした。それは、男女同時三部昇格という素晴らしい成果を残した先輩方の後を任されるということであり、女子にとって初めての二部昇格を目指すということであったので、私達はかなりのプレッシャーを感じていました。けれど同時に、二部昇格を目指せるチームの一員であることを、嬉しく、誇らしく思っていました。こうして不安と希望を抱いて新たな、リーグ戦への一年間は始まりました。

試合に勝つ、昇格を果たすにはどうしたら良いかを考えた時、特に勝てない自分を振り返った時、明白だったことは、練習が練習に終止してしまっていること、又緊張感に負けてしまっているということでした。結果として、ほぼ同レベルの相手であるのに、勝てないということが何度もありました。私達は、九名という本当に少人数で戦わなくてはならず、レベルの底上げは必須であるのに、特に六番手以下の試合経験不足は明らかでした。そのため、土日は必ず何らかの形で試合を行い、試合を特別なことでなく、普通のこととして意識できるように心掛けました。一方、特にレギュラーの五人にとっては、より強い相手との試合の経験が不可欠であり、二部や一部との試合で勝つことが当然であるという意識を持ち、自信となるように、個人戦を重視して練習をし、上部との練習試合や対抗戦を組むようにしてきました。又、普段の練習では、その日の練習で自分が何を達成するべきかをはっきりさせること、プレイに対するアドバイスは、先輩後輩関係なく、気付いた者が、その場で言えるチームの雰囲気づくりをすることを心掛けました。

こうして、一日一日を、リーグ戦へ続く毎日を、昇格だけを夢見て、練習を重ねてきました。その間、プレーが伸び悩んだり、部員の気持ちがテニスから離れそうになったり…と、数多くの問題もありましたが、その度に互いの本音を出し合うことで、結果はより強いものとなったと思います。

そして迎えた四月。三部で一位となり、入替戦を勝って二部へ昇格すること、自分の役割を認識して全力を尽くし、全員で勝つことを誓い、六月からのリーグ戦を迎えました。結果としては、三部との戦いは、六−一、七−〇というスコアで全勝したのですが、どの試合を取っても、苦しい場面は必ずあり、楽に勝てたわけでは決してありませんでした。ですが、一戦一戦と進むに従いチームの気運も高まってゆき、迎えた二十九日、学習院大学との入替戦には、最高潮に達していました。この一日に、今までの一年間全てがかかっていると思うと、夜も寝られない程に、緊張しました。後悔のないように、成果の全てを出し切ろう、そして全勝で二部へ昇格しようと誓い、試合は始まりました。最初にダブルスで力を見せつけ二勝。続くシングルスでも山﨑、岩本が気合いを見せ、早々と二勝を挙げました。ここで既に昇格は確定しましたが、全勝すると誓った以上、喜びは見せず、残る三試合を見守りました。五番手の増田が粘りを見せて、タイブレークの末、勝利し、尾又も故障を乗り越えて勝ち、最後の試合となりました。全員が見守る中、畠中はインカレ出場のプライドと自信を持って堂々と勝利を勝ち取って、念願の全勝での二部昇格を果たしました。終った瞬間は、ただただ嬉しく、涙が止まりませんでした。このチームに居ることの幸せを感じていました。後に自分の手の平を見た時、応援の際に力が入りすぎてできた、爪の食い込んだ跡がありました。それに気が付かない程、一心不乱に応援したこと、勝利を分かち合えたこと、部員全員のことをとても大切に思えたことは、私にとってかけがえのない、一生の財産になりました。

最後に、頼りない主将をいつも支えてくれた下級生、いつも一緒で、喜怒哀楽の全てを共有し、一番の支えだった同期の星野、いつも励ましてくれた男子の皆、本当にありがとう。そして、毎週のコートに、合宿に試合に足を運んで下さり、技術面だけでなく精神面でも御指導頂いた広瀬監督、時に厳しく、時に優しく私達の支えとなり、御指導頂いた、鈴木、大塚、松村コーチ、試合や御電話でいつも私達のことを思いやって下さいました、岸本会長、八木下副会長、豊田理事長、技術面の強化で本当に御世話になりました藤井、山田コーチ、いつも温かい励ましとアドバイスを頂いた舟田先生、栗原先生、そして、多くのOB、OGの皆様、言葉では言い尽せない感謝の気持ちで一杯です。温かい御支援、御指導頂き、本当にありがとうございました。



初めてのリーグ戦

男子主務　大熊　隆史

今年のリーグ戦、幹部であった私達にとっては最後のリーグ戦でした。しかし、自分にとっては初めて勝ち取ったレギュラーの座でした。主務としての仕事をこなしながらの練習で、球を打ちたい時に打てず後髪を引かれる思いで仕事に身が入らなかったり、はたまた仕事に甘えて練習をおろそかにしてみたり…。本番を目前にし、やることはやったんだと言い聞かせたいのに、頭に浮かぶのはこんな思いばかり。不安の中で初めてのリーグ戦は幕を開けたのでした。

初戦の上武戦では、岡・吉崎のダブルスに勇気づけられるが敗退、二戦目の帝京戦では、うれしいダブルス初勝利。三戦目の東農戦では惜しくも勝利を逃がし、四戦目の順天堂戦では、苦しみながら今年度シングルス初勝利。そして最終の日体戦では、皆が目守る中、立教の負けを決定づける痛い敗退。結局自分の成績は二勝八敗、その八敗ともわずかな差で逃がした勝利でした。そしてチーム自体も一ポイント差で三位という形で幕を閉じる結果になりました。四年生が皆奮闘する中、二勝しか出来なかった自分がとても情けなく思いました、と同時に先程「わずかな差」と書いてしまいましたが、その差がとても大きく、厳しかったように感じます。今になって、山田コーチの「練習は嘘をつかない」という言葉が身に染みて来るようです。

そんな自分ですが、うれしく思ったこともあります。一つは、里和の応援の下で最良のパートナーと勝利を分かち合えたこと。もう一つは、主将の村木を中心に、恥じることのない、最高のチームの代表としてリーグ戦を闘えたことです。特に入部したばかりの新一年生の、高い声や真剣な眼差しをコートの上で感じた時は、胸が熱くなりました。私達はもうコートから去り、このリーグ戦を想い出として心にしまうしかありませんが、三年以下現役は、これを教訓として来年に生かして欲しいと思う。

リーグ戦を終えて

女子主務　星野　薫

三部校の中でもダントツと言われ、二部昇格は確実であろうと予想されるなど周囲からのプレッシャー、幹部2人で下級生がレギュラーを占めるというチームをまとめなければいけないという不安とが常に頭の中にありました。チーム自体も何度もつまずき悩みましたが、その度に少しずつまとまり、部員の気持ちも一つになっていきました。そのような中むかえたリーグ戦では一勝をあげるごとに部員の緊張感は増しつつあったものの、必ず勝つという気持ちも加わり、チームの雰囲気も頂天に達していました。

二部学習院大学との入替戦。シングルス№1の畠中が勝った瞬間、何にもかえがたい喜びと感動、一年間のすべての思いが次から次へとわき上がりました。この時の事を私は一生忘れません。

一年間を通して数多くの方々に支えて頂きました。主将吉田には一年生の頃から初心者で始めた私を何度も励まし勇気づけてくれたことにとても感謝しています。そして何よりも数多くの先輩の支え無くしては昇格は得られなかったと思います。毎週コートに足を運んで頂き、基本からテニスを教えて下さった広瀬監督、コーチの方々、お忙しい中試合を見に来て下さるなど常に励まして下さった岸本会長、八木下副会長、豊田理事長、セレクションの際何度も相談にのって下さった中島さん、男女合併してから主務としての仕事も1から始めなければならないことも多かったのですが、お世話になりました浅見さん、梅田さん、秋元さん、他全ての御指導、御協力頂いた先輩方、本当にありがとうございました。

最後に今年は畠中を中心にチームはスタートしたわけですが、テニスの技術面だけでなく、一部昇格、王座優勝と更に上を目指しながらすべての面で強いチームを作り上げていって欲しいと思います。

四年間を終えて

男子副将　岡　利之

一年生の入部当時からの数々の貴重な体験と思い出を胸に秘め、最後のリーグ戦で、私は2部昇格を目指した。トレーニング担当というのが部での役割だった。チームとしてやっていく上で、苦しかったことが山ほどあった。しかし、後輩の死にそうになりながらやっている顔や、同期の奴らの一声で、頑張ることができたと思う。その中で、明立定期戦で勝利したことは本当にうれしかったし、今だに終りの集合で足がガクガク震えていたのを覚えている。何かリーグ戦に向けての手ごたえのようなものを感じることができたし、「やればできるが、やらなきゃできない」ということを確信することができた。何だかわからないが、「テニスがしたい」と自然と思うようになっていった。

「もう、やるだけやっただろう！あとは落ちついて本番だ。」主将の村木がよく言っていた。影でシコシコと努力している、奴の口ぐせで、周りを落ちつかせようと必死になっていたのだろう。始まってからのリーグ戦は本当にあっという間だった。そこには理屈ではない世界がはっきりと存在していた。3度目のリーグ戦出場の私だったが、初出場のような気分だった。「勝ちたい」という気持ちだけの勝負がそこにはあった。やってきたことや、仲間との絆で自分はコートに立っていれたような気もする。気持ちのコントロールが、どれだけ大切で難しいのか、この時、思い知らされた。結果は3部の3位だった。精神的なもろさが常に自分の心の中につきまとって離れることはなかった。もう一回やりたいと心の底から思ったが、もうできなかった。今振り返ると、結果はどうであれ、数々の貴重な経験をさせてもらい、大きな財産を学生時代につくることができたと思う。私たちをサポートして下さったOBの方々にテニスを教えていただけて自分は本当によかったと心から言いたいです。後輩が、我々の意志を引き継いで目標を達成してくれるときを、じっくりと待とうと思っています。

今年度リーグ戦を振り返って

四年　粂田　博史

私は、1年生の頃から運よくリーグ戦に出さしてもらっているので、今年のリーグ戦は4回目となった。私は二年生の頃から自分で立教大学のNO1として自覚を持ってリーグ戦に望んできた。過信かもしれないが、自分がシングルスで負けたら立教大学が負けるとまで思い、今までのリーグ戦に望んできた。事実、私のシングルスの負け数と立教大学の負け数は同じである。昨年のリーグ戦は4部にいて、村木とともにシングルスダブルスともに全勝することができた。今年も村木とともにシングルスダブルス全勝できると私は思っていた。春関は一回戦で二人とも負けインカレにはなれなかったが、夏関では二人とも2回勝ち来年の春関本選ストレートインの資格を得ることができた。登り調子で秋をむかえ、さあもうひと頑張りだという時に私は3ケ月動くこともままならない状態になってしまった。私は小学校の頃から下の歯が前に出てくる「うけくち」の治療をしていた。その手術を昨年の秋にしたからである。それはつらい毎日だった。口はもちろん開かない、舌も切ったのでつばも飲み込めない状態が一週間続いた。そして二週間後には退院したのだが、当然のこと筋力と体力は相当落ちてしまった。そして、昨年の納会の時に2ケ月ぶりにテニスをして自分のテニスの下手さに驚いた。悩んだことのなかったバックのスライスまで下手になっていた。それから私はこの空白の二ケ月間をうめるために一生懸命練習した。テニスがまともにできるようになってからリーグ戦までは二ケ月しかなかった。そして4回目のリーグ戦をむかえた。結果はシングルス二敗ダブルス全勝三部三位残留だった。私はNO1で出て二敗もしてしまった。自分ではリーグ戦に間に合ったと思ったが甘かった。結果は自分としては不満が残ったが、思い出に残るリーグ戦となった。

四年　吉崎　太二

今年のリーグ戦は自分自身今まで努力してきたことが結果として現れた喜びと、一生忘れることの出来ない悔しさとが混ざり合った複雑な思いを私に与えたリーグ戦だったと思います。私の結果は八勝二敗でしたが、八勝した喜びの気持ちよりも私が負けた二試合とも四対五でチームが負けたという諦めの尽かない悔しい結果の方が重く、強く私の胸に刻まれています。しかし、この様な思いと貴重な経験は体育会テニス部に所属してなければ得られず、常に勝ちを意識し一つのことに賭ける素晴らしさを教えてくれ、今となっては一生忘れること無く深く胸に刻み込まれています。

今年一年間を振り返ると、最後の一年間だという追い込まれた思いを手伝って今まで以上にテニスに賭けた一年だったと思います。また、私自身にとっても貴重な一年だったと思います。今年のリーグ戦では自分が勝たなければならないというプレッシャーを自分自身に与えてきました。練習しているのになかなか結果が出なくて苦しんだ時期もあったが、今自分が精一杯出来ることをし、悩むよりも行動しようと常に自分自身に言い聞かせてきました。テニスにばかり打ち込み過ぎて精神的にも疲れてきた時もありましたが、いつも朝から練習に付き合ってくれる友人、死にそうになって頑張っている後輩の顔を見て自分自身を振い立たせてきました。秋を過ぎると徐々に勝てるようになり自分のしている行動は間違ってはいないという確信と、自分自身に自信が持てるように成ってきました。

部員の顔を見ながら頑張ってきた自分にとって、自分自身が勝つことにより部員の顔が笑顔になり自分を迎えてくれることにとても喜びを感じました。また私はテニス、リーグ戦というものを通じ、チームワークの素晴らしさ監督、コーチ、OB会の厳しさと温かさに直接肌で感じることが出来、貴重な財産を手に入れたと思います。

「4年間を振り返って」

四年　里和　勇人

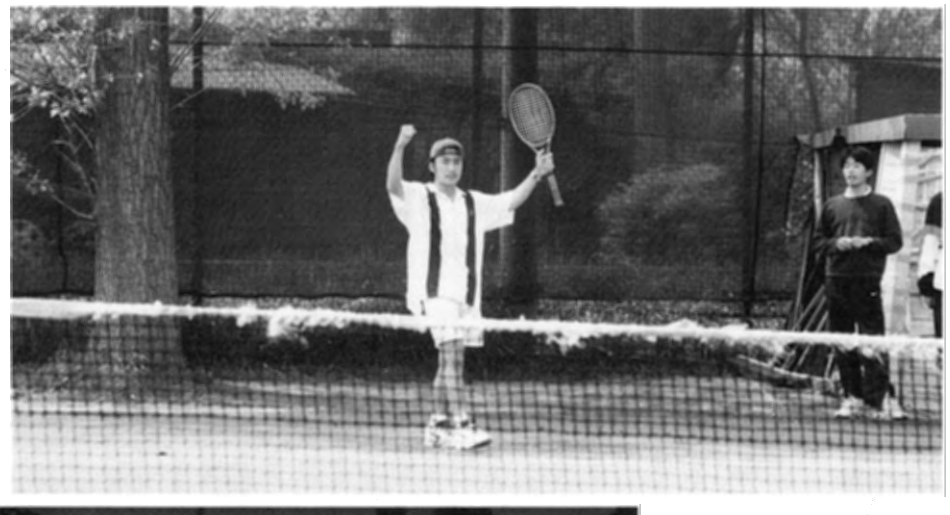
今年度のリーグ戦、立教大学硬式テニス部男子は2部に上がれずに終わった。常に前評判の高かった僕らだが、この4年間で昇格したのは2回のみ。最後の年に改めてリーグ戦の厳しさを思い知らされた。

思えば僕らが入学した年は5部だった。入りたての僕らは大学テニスのレベルがわからず、先輩たちの練習を見ながら何てレベルの高い世界なんだろう、と思ったものだった。

1年の時のリーグ戦といえば、僕らはミスをしないようにと必死で走りまわっていた記憶がある。その年は4部に昇格し、最初のリーグ戦は辛いながらも実りある、うれしい戦いだった。

その後、僕は春関から学連に出ており、今年部員として自校のリーグ戦を見るのは3年ぶりだった。2・3年時のリーグ戦は自校の結果は部員や他の学連から結果として聞くのみだった。自分で直接試合を見れないというのは何ともどかしいもので、携帯電話の便利さを実感した。

3年ぶりにリーグ戦を見たといっても帝京戦の一対戦しか見れなかった。それでもそこには一年のときとは違う同輩等がいた。そこにいたのは3年前、部活の中心として大きな存在だった4年生であり、当時の僕らのような1年生がいた。立派になった同輩たち（変な言い方だが）をたのもしく思うとともに、1年生たちの姿に懐かしさを覚えた。リーグ戦というのは1年に1度しかなく、どの部にとっても個人にとっても、大変貴重な試合である。例えそれがどんなに辛かったとしても、1年としてのリーグ戦は一生で一回きりであり、他の学年も同様である。楽しむわけではないがそれぞれの立場からリーグ戦に参加すると考えるとこれほど面白い大会も無いのではなかろうか。来年からまた新たにOBという立場からリーグ戦を観戦することになるが、また新しい視点からの発見があるのではないかと楽しみである。後輩の戦い振りが今から楽しみである。



OBの声

カルチャーショック

川上　岳先輩（S.33年卒）

父親にラケットを買ってもらった事がキッカケで、立教中学校、高等学校、大学を通して庭球部に席を置くことになってしまった。

そしてそれが一生の生きざまを左右することになるとは当時考えもしなかった。学校の名を背負って戦ってきた部生活は、国体（東京代表）、インカレ、オールジャパンに出場（リーグ戦は1部）したものの、超一流選手になれず、楽しかったというより、しんどかったという想いの学生生活だった。

しかし、テニスの実業団結成に当たって、入社するハメになってしまった日興証券で、サンフランシスコに転勤することになり、彼の地で味わったテニスに私はまさにカルチャーショックを与えられることになった。

当時日本の学校の体育会ではどこでも精神論をもとにした体験主義にもとずく指導を受けるのが普通だった。一年でも先輩は先輩で、無意味と思えることも精神の鍛練という名のもとに絶対服従が当たり前の体育会生活で、ほかのひとたちとの指導や練習の交流は無かった。

ところが、アメリカでは、無料で楽しめる公園のテニスコートでやっている人たち、クラブで過ごしているメンバーの人たち、スタンフォード大学のテニスチームの練習振り、全てスポーツへの取り組み方、考え方が違っていた。

「テニスをすることを楽しむ」ということが基本になっている彼らの考え方を見、それでも、チームの秩序が保たれているのを見て、大人と子供の差のようなショックを感じた。

日本には「好きこそものの上手なれ」と言うことわざがある。

私も学生時代テニスをもっと楽しめ、好きになっていれば、無心になれ、集中力も高まった練習や試合が出来、一流選手の仲間入りが出来たかもしれない。

でも、別の目でテニスを見られた僕に㈳日本プロテニス協会から事務局長の要請が舞い込んだ。そこで、10年の約束で初代事務局長を引き受け、まずやったことは国際化であった。セイコースーパーテニスの開催権を取得、アメリカプロテニス協会と提携して指導者の国際ライセンスの発行に取り組んだ。

それらが済んで、協会からも離れ、今やりたいことは、まったく新しいスポーツ（テニス）の上達法だ。コンピューターなどを駆使した最先端の技術の集積機器を使って、「疑似体験」、「バーチャルシミュレーションレッスン」などが「楽に」「楽しく」「簡単に」そのスポーツに取り組めるシステムを開発し、こんどは、外国にカルチャーショックを与えたいと思っている。

もらったラケット一本がこんな人生を歩む人間を造るなんて、テニスもそんなに捨てたものではない、諸君もせいぜいテニスと長いつきあいをしてほしいものだ。

現役諸君へ

安達　幸男先輩（S47年卒）

卒業して四半世紀も経ってしまったと思うと随分昔のことだが、最近のことより、学生時代のことの方が鮮烈に思い出されるのは歳をとった証拠か。

私達の時代は、専用のテニスコートが無く、桜台、上板橋、巣鴨、大森、そして志木と毎年のように練習する場所が変わり、テニス移民族のようなクラブ活動であった。大学に入学したその年のリーグ戦は神和住氏が率いる法政大、坂井氏のいた早大等に惨敗し、二部との入替戦も負け、二部へ陥落。全員坊主頭になったのは忘れられない。当時は、個人戦も勿論、重要ではあったが、リーグ戦に賭ける意気込みは凄まじいものがあり、何やら戦争に出かける兵士のような緊張感と悲壮感を漂わして試合に臨んでいた。私はこの雰囲気が好きで、個人的にも成績は良かった思う。テニスは基本的には個人プレーだけに、団体戦のもつ、一体感、団結力といったものは他では得られない貴重なことだったような気がする。

今から考えるとクラブ活動は厳しく苦しかったが、部活が終わった時の解放感は風呂上がりのビールのような清涼感があった。と同時にもう少ししっかり練習しておけばもうちょっとは上手になっていたのにと考えたこともある。

現在、現役学生の方がどのような生活やクラブ活動をしているのか知るよしも無いが、先輩として一言。長い人生の中でのたったの四年間なので、思いっきりテニスに打ち込んでみてはどうですか。より走って、足腰を鍛えることと、ラケットを数多く振ること、で今よりずっと上手くなると思います。最近は、月に一、二回テニスをする程度で、あまり体が動かなくなりました。機会があれば現役の学生さんと打ち合うことができればいいなと考えています。もう取り戻せない青春を過ぎてしまった者として、一つのことに打ち込むことの大切さ、重要性を痛感しています。現役の皆さん、頑張って下さい。

二度目のテニス部LIFE

飯塚　圭子先輩（S50年卒）

大学を卒業以来再び新学院のコートに足が向くようになったのは、長男の立教中学校入学がきっかけでした。子育ての合間をぬって丁度テニスを楽しみ始めた頃でしたので、若い人達のプレイは自分が日常同世代の仲間と楽しんでいたものとは違い、すっかり忘れかけていた基本のテニスを思い起こさせてくれました。当初はイメージトレーニングのつもりで彼女達のプレイを見に行っていました。ところが何度も通っているうちに、「もしかしたら今ならまだ自分もこの若いテニスに少しでも近づけるかもしれない。」などと、無謀な考えを持ち始め、コートに足を運ぶのがより楽しくなってきてしまったのです。

それから早や五年。我が子の年令も現役とそう変わらなくなり、当時の一年生も卒業、就職と大学を巣立って行きました。新座での練習、他大学との対抗戦、合宿、リーグ戦、学生達の生活は自分の現役時代と同様に、一年一年巡っていました。部員紹介や日程等のお便りを頂くとその細やかな気づかいに黙ってはいられず、いつしか自分の昔の姿と重なり合わせて、目をはなす事ができなくなってしまったのです。

数年前のリーグ戦の最中、勝利を収めた現役達を前に、その前日たまたま電車の中で目にした「関東大学テニスリーグ」のプログラムの事を話しました。「あなた達も今日のようにそれぞれの役割を精いっぱい果たし、皆の力で一戦ずつ勝ち進みなさい。そしていつか、プログラムのメンバー表に、一部校の選手だけが載せてもらえる顔写真入りで名前を連らねられるよう頑張りなさい。その日が来るのをOGは楽しみに待っていますよ。」と。その時目をキラキラと輝かせていた新入生も一年後にはたくましく成長し、今年二部昇格には、先輩達を助け大いに活躍してくれました。今私の夢、OGの夢、彼女達の夢が直近に迫ってきているかと思うと、期待と喜びで胸がいっぱいです。

OB・OGの方々。男子と女子が合併して一年がたちました。長い伝統のある男子部OB会には、大切に継承して行きたい部分が数多くあると思います。しかし女子と共に歩き始めた今、無理なく有意義に、長く連れ添って頂くためには、時には新しい考え方も必要だと思います。今までOG会に参加して頂いた方達に、引き続きセントポールテニスクラブへの積極的な参加をして頂いてこそ喜ばしい事だと思います。家庭に入る事の多いOGにとって、家族の協力を得て催し物に出席して頂くためには、会費の面や会の内容についても気配りをして差し上げられたら、より多くの方に楽しんでもらえるのではないでしょうか。役員の方達も数多くのOGの参加を待ち望んでいらっしゃいます。多方面に渡っての率直なご意見を寄せて頂く事が、新しいセントポールテニスクラブの出発に心強い支えとなります。

いずれこの道を次々と歩んでくる後輩達のためにも、セントポールテニスクラブを皆さんで盛り上げ、一層楽しく充実した集いにしようではありませんか。世代を越え、いつまでも健康に、共にテニスで通じた友人達と集える事に感謝したいと思います。

学生諸君へ

岡崎　美穂先輩（H１年卒）

こうありたいと強く願うことから全ては始まると思う。〝絶対にインカレになる〟。この気持ちから始まった。それは〝ネットに出る恐怖心を取り除きたい〟そして〝相手を十分に追い込んで、楽にポイントをとりたい〟とつながり、私のアングルショットとスマッシュの徹底的な練習へと続いた。不思議と迷いはなかったのを覚えている。

現役の皆さんには強く願う気持ちを持ち続けて欲しい。それは安っぽい精神論ではなく、常に根底に流れていくのである。心のどこかにあきらめがあればそれは達成できない。私は同じ相手に何度も負けたし、「打ちすぎ」と非難されたりもした。しかし打ち続けて自分の全体的なスピードを上げなければ緩急は利かず、インカレでは戦えないと信じていた。

取り違えて欲しくないのは、「アドバイスを聞くな」ということではないということである。実際に先輩やコーチが、私のショートクロスが武器になるとか、ネットにつけなきゃ一生弱関だ、という言葉をくださったことが宝になっているのだ。

大切なのは、たくさんの情報と限られた時間をOrganize（：組織する。創立する。）する自己管理能力ではないだろうか。

現在仕事としてテニスのイベントやコーチングに携わる中で、亜細亜大学庭球部と接する機会があり、学生が自己管理のために使っているシートを見ることができたので紹介したい。

ご存じの方も多いと思うが、アメリカの大学スポーツではGPA（Grade Point Average：成績表）が悪いと練習にも参加できないという厳しい一面がある。皆さんの選んだ4年間の学生生活は、これからの人生に向けても自己管理の能力を高める絶好の練習場所だと思う。

そして最後に、例えば、強く願う気持ちが翳ったときにも、同じ場所に同じ時間を共有する仲間がいるということを忘れないで欲しい。1人じゃない。吉田さん、あなたの場所はそこにある！

確立した個があり、かつ与えあうことのできるチームとしての強さと豊かさが生まれるように、いつも心から応援している先輩のことも忘れないで欲しい。困ったことがあったら必ず駆けつけますから。

諸先輩を差し置いてペンを取る僭越をお許しください。

亜細亜大学テニス部

スポーツコンディショニングのＱＣ用紙

1997　　氏名　　生年月日　　年齢　　性

項　目	単　位	目標値	月 ／	火 ／	水 ／	木 ／	金 ／	土 ／	備　考
午前の練習時間	時間＋分								
午後の練習時間	時間＋分								
総試合数	セット								
総トレーニング時間	時間＋分								
昨日の就寝時刻	時間：分								
今朝の起床時刻	時間：分								
睡眠時間	時間＋分								
朝の「体」の調子	１－５								
朝の「心」の調子	１－５								
朝食時刻	時間：分								
食事の充実度	１－５								
昼食時刻	時間：分								
食事の充実度	１－５								
昼寝の時間	時間＋分								
帰宅時刻	時間：分								
夕食時刻	時間：分								
食事の充実度	１－５								
その他の食事	時間：分								
食事の充実度	１－５								
牛乳摂取量	cc								
生理	○／×								
排便の回数	回								
排便の時刻　1st	時間：分								
一日の疲労感　「体」	１－５								
一日の疲労感　「心」	１－５								
練習前の体重	kg								
練習後の体重	kg								
風呂上がりの体重	１／10kg								
体脂肪率	%								
身長	cm								
テレビ・余暇時間	時間＋分								
授業	時限（90）								
勉強時間	時間＋分								
読書	時間＋分								

＊時刻は24時間表記で記入
＊朝の「体」と「心」は５段階で評価
５：発達中、４：好調、３：不調、２：痛み、悩みあり、１：怪我、疾病、異常あり
＊一日の「体」と「心」の疲労感は５段階で評価
５：元気一杯、４：元気、３：どちらでもない、２：疲れた、１：疲れ切った
＊練習時間はオンコートの技術練習
＊トレーニングは技術練習以外

TENNIS

中学・高校通信

中学校庭球部の活動

立教中学校テニス部副部長
西村　博文先生

八月十八日から広島県尾道市の県立びんご運動公園テニスコートで行なわれた第二十四回全国中学生選手権大会に於て、十四年ぶり二度目の優勝をすることができた。

準決勝　立教３－０東海
（Ｄ２－０）（愛知）
（Ｓ１－０）
決　勝　立教３－１甲南
（Ｄ２－０）（兵庫）
（Ｓ１－１）
（打切り）

今年のチームは都大会、関東大会ともに決勝に進みながら、最後の壁を破れずにいたが、七月の那須合宿で立大体育会を中心とする方々の真摯な指導、訓練を受けて急速に力をつけた。更に、大会直前には立大鷲田監督直々のプログラムで体育会四年生がヒッティングパートナーを務めてくれた。火をつけられると若者の奔流するエネルギーは思いがけぬ力を発揮する。それまでのどこかひ弱で、まとまりに欠けていたチームが、まるでなにものかが乗り移ったように強気で自身に満ちたプレイをする者に変身して行った。第３シードをもらったとは言え、多くの人は、いや選手達自身すらもこの結果を予想してはいなかったかも知れない。個性的な選手達をまとめた石川主将、選手達ののびやかなプレイを引き出した重原部長の采配、炎天下、応援をして支えた父母の方々、すべてがかかわって成し得た勝利であった。

去る十一月三日には、昨年再発足した中学校庭球部ＯＢ会（倉光哲会長、稲田保裕幹事長）がこの勝利を祝い、現役、ＯＢ対抗戦で胸を貸して下さった。当日は五十名を越える方々が集まり、試合後のパーティーで現役部員全員を労らっていただいた。部員達も七十年を越える立教テニスの礎の上にプレイをしているという自覚を更に強めたと思う。

部の指導にかかわる私達も、その責任を感じ、伝統の上に新しい部の創造のための組織、運営を検討中である。

立教高等学校のテニス部の戦績

立教高校テニス部顧問
平山　晋先生

新チームになった昨年度秋からの成績は以下の通りである。

96年度
新人大会
個人戦　シングルス
ベスト４　米田
団体戦　３位
米田・原島・浜田・須江
磯田・田中諒

97年度
関東大会県予選
団体戦　準優勝
米田・浜田・原島・磯田・田中
個人戦
シングルス　３位　米田
ダブルス　３位浜田・米田
関東大会
団体戦出場
米田・浜田・原島・磯田・田中
個人戦
シングルス出場　米田
インターハイ県予選
団体戦　準優勝
米田・浜田・原島・磯田・田中
個人戦
シングルス　４位　米田
ベスト８　磯田・須江
16　原島・浜田
ダブルス　３位米田・浜田
インターハイ
個人戦
シングルス出場　米田
新人大会埼玉県大会
個人戦
シングルス　３位　米田
ベスト８　浜田
ベスト16　須江・原島
ダブルス　２位米田・浜田
ベスト８　吉原・大島
団体戦　準優勝
米田・浜田・須江・原島・吉原・田中

本年度は、関東・インハイ予選の団体戦で浦和学院に決勝で１－２と惜敗し、必勝を期した新人大会の団体戦でも健闘むなしく２－３という結果に終わった。今後の関東選抜及び全国選抜では、試合の方法の変更により層の厚い本校には有利と思われ、浦学戦の敗戦を教訓に、是非上位入賞を果たしたい。

卒業生紹介

○阿部　宏
有言実行。あらゆる意味でプロでした。おつかれさまでした。

○神藤　浩史
部を陰となり陽なたとなって支えて下さいました。主務おつかれさまでした。

○久々湊仁彦
理論に裏付けされたそのテニスは、憧れの的でした。副将おつかれさまでした。

○若狭　信治
そのひたむきな努力は、見てる者の胸を熱くさせました。社会に出てもがんばって下さい。

○柳　玲子
主将として一年間明るくテニスを支えて下さいました。

○戸澤　愛
主務としていつも縁の下の力持ちの役目を果たして下さいました。

○武田　理恵
トレーナーとして部員の健康状態を気遣い、いつも優しく接して下さいました。

○庄司　友子
いつも明るく、チームの重要なムードメーカーとして部を盛り上げて下さいました。

同立定期戦（男子）

平成９年度の同立定期戦は立教大学で行われました。ダブルス・シングルス共に同志社に押される結果になってしまいました。

午前中のダブルスでは№１の岡・吉崎組、№２の村木・島津組がファイナルセットまでもつれる大接戦となりましたが、あと一歩のところで同志社に流れをもっていかれ敗れてしまい、ダブルス０－３がつき、その流れを止める事ができないまま午後のシングルスでは№４～№６全て破れ、№３の吉崎さんは安定したサービスとネットプレーで本校に一勝をもたらしたが№１の村木さん№２の岡さんは共に試合途中で日没となってしまい結果として６－１で同志社が勝ち、前年の借りを返される形となってしまいました。

敗因として考えられるのは、関東学生（当時）の粂田さんが出ていない時の本校の実力が力不足であった事と、一年生として出た真田、和田・井口が同志社と比べて技術的に差があったためだろう。しかし、それほど実力差のない同志社に負けた最大の要因は、試合経験の違いにあるのではないかと思う。相手は関西一部で試合をし、また一人一人の選手がジュニアの頃から多くの試合をし、競ったゲームの時に流れをもっていくコツを本校より知っているように感じた。

今回はこのような悔しい結果となってしまったが反省すべき点を多く見つける事ができたのは大きな収穫である。今回の負けを無駄にせず新たに部員として加わった一年生４人と共に次回は相手を恐れずあなどらず全力で頑張りたい。

二年　和田　憲治

同立定期戦（女子）

昨夜の楽しいレセプションはさておき、さあ、今日の十一月二十三日は同立定期戦です。今年の我が部の同立戦への意気込み、それはそのままリーグ戦二部昇格へと結び付いていました。十一月に入ってからの私達はリーグ戦を年頭に同部との対抗戦を多く重ねていました。戦績は負け知らずです。今や部員は団結し、押せ押せムードの勢いは決して止まろうとはしませんでした。

試合はダブルス二本、シングルス五本、計七本が行われました。まず初めにダブルスの試合が行われました。№１は二年生の畠中・若本組、№２は一年生の尾又・山﨑組です。二年生は二度目の同立戦ということもあり、先輩としての落ち着きを感じました。一年生も初めての同立戦にも関わらず今までの練習の成果を上げ、両組共に勝利を得ました。立教の勢いが波に乗る中、続いてシングルスの試合が始まりました。シングルスにはダブルスを行った四人と一年生の増田が出場しました。五人共一球一球に集中し、粘り強いプレーをみせ、同志社を圧倒してしまいました。その結果四対一で同志社を大きくリードしました。負けてしまった№２もタイブレークにもつれこむ接戦で立教の強さを見せつけてくれました。総合的には六対一で立教が圧勝し、立教はリーグ戦に向けてさらに勢いに乗りました。主力メンバーが次回の同立戦に残るだろうと考えられるので、来年京都で行われる定期戦の勝利に向かってまた一年間精進していこうと誓いました。

二年　吉田真理子

明立定期戦

リーグ戦まで約半年の11月の時期に毎年行われる明立定期戦、今回はポイントゲッターの一人である粂田さんを欠いて望んだ対抗戦でした。この時期、日に日に迫るリーグ戦への意気込みが部員全員の間にはっきりと表われていました。そして当日、主将の村木さんの集合での９－０をつけて勝とうという声に、そして他の先輩方の厳しい表情にリーグを前にして、こんな所で負けるわけにはいかないんだということを痛感しました。

私自身は、ダブルスで村木さんと組ませて頂いて、結果的には勝ちはしたものの、精神的にも技術的にも村木さんにたよってしまい、今の自分のままではいけないということを教えられました。他のどの試合も絶対に負けられないという気迫と勢いにおいて相手校に勝っていました。特にダブルスＮＯ１の岡さんと吉崎さんの試合は、インカレダブルスである相手校に一歩もひかないものでした。普段の練習で作り上げてきた、自信がいかに大切なものであるか、またその自信をつけるためにどれだけの練習が必要であるかを試合の中で無言の内に教えてくれました。このダブルスをファイナルセットの末ものにし、ダブルスを２対１とし、勢いをつけました。シングルスの試合においても実力においては相手校にやや分があったものの、応援、ジャッジ、ボーラー、選手が一体となって戦い、３対３として、計５対４で立教大学が勝利を収めました。まさに部員全員が一丸となって戦った対抗戦であり、私自身としても、この試合に選手として出場でしたことを誇りに思いました。リーグ戦に向けて大きな弾みをつける一勝となったのではなかったでしょうか。

この試合を通じて明治大学のテニス部と仲良くなれたということもこの定期戦の大きな意味の一つだと思います。その様な点も含めて、毎年恒例である明立定期戦は今回も有意義なものとなりました。

二年　井口　博之

合同練習会

平成八年度の小・中・高・大テニス部合同練習会は、例年通り十一月二十三日に新学院・立中コートで行われました。今回の合同練習会は、自分にとって特に思い入れの強いものでした。自分は、小学校から立教に在学し、なおかつ小・中・高とテニス部に在籍していました。そして大学に入学し、初めて参加する合同練習会となった今回は、自分のたどってきた歴史を振り返る良い機会となったのです。

今まで、中学や高校の練習や合宿は、何度か参加する機会があったのですが、その度に運悪く試験や授業が重なり、一日かけてじっくり見れるのを、とてもたのしみにしていました。

久しぶりに立った中学のコートは、そんなはずはないのに、なぜか小さく感じました。しかし、そこでテニスをしている小学生や中学生には、まぎれもなく数年前の自分を見ることができました。みんながテニスをしている姿には、技術向上の為のひたむきな努力はもちろんなのですが、それ以上に、ただラケットでボールを打つ喜び、体を目いっぱい動かすたのしさを強く感じることができました。それこそがテニスの原点、いやスポーツの原点であることを、自分の後輩達に教えてもらったような気がします。

今回久しぶりにお会いした先生方の中には、全然お変わりないなと感じた先生もいらっしゃれば、やはり、少しお年をめされたかなと感じる先生もいらっしゃいました。しかし、立教のテニスを盛り上げていこうという気持ちに、昔も今も変わりははありません。今年は中学校が、全国優勝を成し遂げました。うれしい気持ちの一方で、自分達も中学生の良き手本となれるよう頑張らねば、と改めて気を引き締めました。世代は違えど、こうして、切磋琢磨し合う関係こそが、立教のテニスを盛り上げていく基礎となるのではないでしょうか。

三年　大野　潤三

男子主将ご挨拶

新主将　高田健太郎

本年度主将を務めさせて頂くことになりました。社会学部産業関係学科三年、高田健太郎です。宜しくお願いします。

昨年度は前主将の村木さんを中心とした四年生の方々に引っ張られ精神的にも体力的にもタフなチームで現役一丸となってリーグ戦に望みましたが一ポイント差で入替戦を逃し三部三位という悔しい結果に終わってしまいました。リーグ戦直後のあの悔しさは今も忘れることができません。本年の現役は一年もみんながその悔しさを共にしています。その悔しさを行動に移し今年こそ良い結果を残したいと思います。

昨年度のリーグ戦もＯＢの方々にはたくさんのご声援をいただき現役一同大変勇気づけられました。ありがとうございました。リーグ第一戦の上武大学でたくさんのＯＢの方々に来ていただいた時の心強さは第一戦の勝利につながったのではないかと思います。本年度もたくさんのご声援宜しくお願いします。

本年度の本学は昨年のレギュラーのうち五人が抜け、リーグ戦の経験者は二年の和田と真田の二人だけとなり苦しい戦いが予想されています。しかし入部をはじめとした有望な一年生が加入し彼らの成長によってはその穴を埋められると私は信じています。また、彼らが未来の本学の中心となれると私は思います。昨年度が鷲田監督の御指導の中で本学のひとつのサイクルの終わりだったと思います。ですから私の代からまたチームを作りあげたいのです。その中で総合的に私達に足りないと思うのは試合運びや精神的な強さを含めた経験です。三部の他校はジュニア上がりの選手が多くその点で劣ってしまうのです。これを例年より多くの対抗戦で埋めていきリーグ戦につなげていきたいのです。

前にもふれさせていただきましたが本年度は大変苦しい戦いが予想されています。しかし、我々現役一同は一致団結し精一杯目標を追い求めたいと思います。これからも御指導、御協力の程宜しくお願いします。

女子主将ご挨拶

新主将　畠中　暁子

本年度、主将を務めさせて頂くことになりました、法学部、法学科三年の畠中暁子です。宜しくお願い致します。

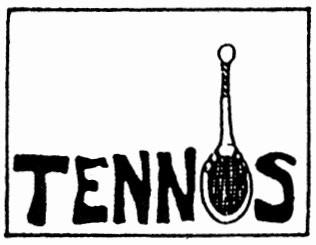
昨年度は、念願叶って女子部初の二部昇格を果たすことが出来ました。リーグ戦前から昇格することは当然というような周囲の反応や、期待があっただけに、私達の心の中には負けられないというプレッシャーがありました。しかし、その期待が良い刺激となって、三部全勝、二部昇格という結果を残すことができました。

今年は、元気な三人の新入部員を迎え、総勢十人のチームであります。昨年と同様、少人数ではありますが、個人個人の意識を高め、「一部昇格」という目標に向かって前進していきたいと思っております。

私達は、入学して以来、リーグ戦で負けを味わったことがないという怖さをもっています。一部の壁は、今までとは違う厳しいものだと思います。その為、上部校との練習、対抗戦等を多くとり入れ、同レベル以下に勝つ事は勿論、上のレベルの人にいかにして勝つか、を考えながらやっていきたいと思っております。

今、一番の課題としては、大事なポイントでの勝負強さを身につけることです。一球のボールに対する執着心と、攻めの気持ちを忘れずにプレーすることを、心掛けていきたいと思っております。

「一部昇格」という目標を目指し、先輩方の築いて下さった立教テニス部の名に恥じぬよう、部員一同頑張ります。今後とも、皆様の御支援、御指導の程宜しく御願い致します。



新入生紹介

文学部　教育学科

一年　工藤　雅也

私がテニスを始めたのは、母に勧められて立教中学校の庭球部に入部してからでした。その後、中学、高校と六年間テニスを続けてきました。

私が体育会硬式庭球部に入部した理由は、最後の学生生活であるこの四年間を有意義に過ごすためには、何か一つの事に打ち込むことだと考えたからであり、中学、高校でのそれぞれの三年間を終えるたびに、「このまま終わりたくない」と後悔したからです。だから、社会に出て大学生活を振り返った時に後悔していないように、技術・精神・肉体ともに鍛え、強くなり、一つでも多く勝ちたいです。そして、個人では関東学生になり、できればインカレにも出ることが出来ればと思います。

それと同時に、硬式庭球部での活動を通して、多くの事を学び、人間形成に役立て、何らかの自信につながれば幸いです。

どうぞ宜しくお願い致します。

経済学部経済学科

一年　入部　圭介

僕がテニスを始めたのは、父親の影響からで、小学五年生の時からでした。それからは、ほとんど、毎日のようにテニススクールに通ってラケットを振ってきて、中学・高校とそれが続き、遂にそれが大学まで続いてしまい、その結果、自分の中では、サークルなどに入ろうかと考えることなく、体育会テニス部に入っていました。入部した当初の頃は、部活の練習はもちろんのこと、その他の一年生の仕事などが、中学・高校までとは比べものにならないほどキツく感じたため、友達にも、「もうやめる（退部する）」などと言っていた程、退部を考えていましたが、一年を通した部活の中で最もキツいと思われる、群馬県の館林市で行われる「夏合宿」を乗り切ってからは、自分に自信がつき、これからも頑張れそうな気がして、友達にも、「もうやめないよ、これから頑張るから。」と胸を張って言えるようになりました。これからの大学生生活を、体育会テニス部部員として頑張ります。今後も応援よろしくお願いします。

法学部法学科

一年　中村　昌平

高校の時テニス部で、主な成績が残せなかったことと、大学生活で何か一つこれをやった、というものが欲しくて、体育会テニス部に入部しました。しかし、入部当初は、コート整備、授業、部活などを、こなしていくのがやっとといった感じでした、

入部したての四月にリーグ戦がありました。まだ部活について何も知らなかった私は、その尋常ではない雰囲気に驚かされました。また、二部昇格に向かって、一つになっていた先輩達が、とてもたのもしく思えてのを覚えています。特に四年生に対しては、あこがれや尊敬といった気持ちを抱きました。

夏休み前に、一年が六人から四人に減り、とても寂しくなりましたが、逆に四人が一致団結する事ができました。また、部員も全員で十一人と、とても少ないわけですが、その分、とてもまとまっているのではないかと思います。

最近あった秋季リーグで、上部校の選手とやる機会があり、自分の実力不足を思い知らされました。リーグまで残された時間で、できるかぎりの事を、やっていきたいと思います。

私の目標は、部をひっぱっていけるような選手になることです。そのためにも、資格者になることを身近な目標として、がんばっていきたいです。

法学部法学科

一年　藤井　学

立教大学法学部法学科一年の藤井学です。よろしくお願い致します。

僕には夢があります。それは村木さんのように、みんなの期待を背負って立教のレギュラーとして大活躍することです。ただレギュラーになればいいということではありません。勝ち駒としてリーグを戦いたいのです。そして是非、自分達の代になったら、何部リーグでも絶対に優勝して、上部昇格をして引退したいです。そのためには、どんなに苦しくても練習に励み続けていきたいと思います。はっきりいって、今の僕にはその力がありません。でも僕にはまだ三年あります。必ず圧倒的な力を持つテニスプレーヤーになり、立教を支える柱になりたいです。幸いなことに、僕等の代はテニスの技術はもちろん、人柄的にもいい奴ばかりなので、将来を楽しみに待つことができます。

僕は立教が大好きです。立教テニス部が大好きです。なぜなら、立教テニス部は暖かいからです。先輩、ＯＢの方々、みんなでひとつの家族というか、本当の兄弟のような気がします。特に、高校生の時に参加させて頂いたリーグ練の時、そして一生忘れないだろう、初めてのリーグ戦の時には、「仲間ってこんなにひとつになれるんだ。こんなに励まし合い、信頼し合えるんだ。」と、熱くなっている自分に気がつきました。あの思いを僕は生涯忘れることはないだろうし、これからも求め続けていくことと思います。

先輩が残してくれた「熱い思い」をいつも感じながら、立教テニス部を盛り上げていきたいと思います。僕はまだ一年で、技術も未熟ですが、気持ちだけは絶対に負けません。立教テニス部をより素晴らしい部にすることができるよう努力していきます。そして必ずや、テニス選手としても大成したいと思います。

色々とご迷惑をおかけすることと思いますが、どうぞごひいきに、よろしくお願い致します。

インカレ狙います。

一年　井口　郁子

中学で始めたテニスを高校では続けなかった私ですが、入学する前から、大学ではまたテニスをやりたいと思っていました。入学式以降、いろいろなサークルから勧誘は受けたものの興味を持てず、また二、三のテニスサークルの話を聞いてみましたが、魅力的にものはなく、体育会テニス部の出店に出向き、先輩方の話を伺いました。テニス部の話をして下さった先輩方がみなさん部に所属していることを誇りに思い、自信を持って勧誘して下さっている姿が非常に印象的でした。そのように話す先輩方の姿や部内の雰囲気が気に入り、体力面等で不安はあったものの、その日に入部を決めてしまいました。やるのであれば、そのことに真剣に取り組みたい、また上手くなりたいと思い、私は体育会テニス部を選びました。そしてこの部でがんばっていくのだという思いは、入部を決めてから一ケ月も経たずに向えた、学習院大学との入替戦で二部昇格を決めた瞬間を目の当たりにして一層強くなりました。

高校の三年間ではいろいろな事を経験したものの、充実していたとはいえませんでした。そのような高校生活を過ごし、何か一つの事でもやり遂げたといえる事があって、大学での四年間が意義あるものになると考えています。私はテニス部に所属し、最後までやり遂げることで、その後の社会生活における自信とし、そこで学んだことを生かしていきたいと思っています。

私は今、人間性のみならず、技術的にも素晴らしい先輩方に囲まれ、テニスをするのに最高の環境にいます。その中で私は、関東学生になること、また、立教大学の代表としてリーグ戦で戦えるようになることを目標とし、これからの練習に励んでいきたいと思っています。

一年　馬場亜希子

私が体育会硬式テニス部に入部した理由は、自分が本当にテニスが好きで、技術的にも高いレベルまで向上したい、と強く思ったからです。中学、高校と何かスポーツをやりたい、とただ漠然とテニスを続けてきた私にとってある程度テニスができて、時間的に余裕のありそうなサークルの魅力にもかなりひかれたこともありました。しかし、体育会の練習や四月のリーグ戦を見学しに行くと、先輩方がとても必死にボールを追っている姿やテニスの技術的なレベルの高さを見て、私もテニスがしたい、と私自身、今まで感じたことのないテニスへの強い気持ちが生まれ、私は本当にテニスが好きであることに気付き、先輩方のように上手になりたい、と思うようになったので入部しました。今は、当時よりもテニスの奥の深さを知り、テニス部に入部して本当に良かった、と思っています。

私が体育会硬式テニス部に入部したもうひとつの理由に、目標に向かって努力する自分が好きなので、そんな自分を求めていたことにもあります。今、私にはたくさんの目標や目標とする先輩がいます。先輩のようにサーブが速く確実に入るようになりたい、ボレーを強化したい、関東学生の資格が欲しい、等とにかく私の周囲には目標がたくさんあります。その中で、私が最終的に置いた目標は、全日本学生王座決定戦にチームが出場し、自分がそのメンバーとして試合に出場することです。先日、全日本学生王座決定戦の結果が新聞に掲載されているのを見て、私たちもこの大会に出場したい、と強く思ったからです。この目標は、今の私にとって夢のまた夢のようなものですが、一日一日、夢が現実のものとなるように、着実に力をつけていきたい、と思います。この夢は夢で終わらせたくないので、毎日の練習を懸命に励みたいと思います。

一年　太田佳世子

実りのある大学生活を送りたいという気持ちを抱いて入学した私は、大学で何か一つのことに真剣に打ち込みたいと思っていました。それが勉強であるのか、または他の何かであるのかは、はっきり決めていなかったのですが、大学でに四年間を私にとって意味あるものにしたかったのです。私は、中学・高校とテニス部に所属していました。中高一貫教育を特徴していた学校だったので、部活は中学一年生から高校二年生までが一緒に活動していました。学校にはテニスコートが三面しかなく、練習も高校生が中心だったので、中学生の頃は一日に二十分ボールを打たせてもらえればいい方で、一回もラケットを握らせてもらえず、ボール拾いばかりしている日もありました。だから、テニスはあまり上達せず、テニスの試合では悔しい思いばかりしていて、テニスの真の面白さである「勝つ」経験があまりできませんでした。このまま私の中で「テニス」を中途半端に終えたくなかったので、大学でもう一度テニスに真剣にとりくんでみようと思い、体育会テニス部に入部しました。

立教大学の体育会テニス部で、熱心に指導して下さる監督や先輩方、互いに切磋琢磨し合える仲間に巡り会えて本当によかったと思います。この恵まれた環境を生かして、日々の練習に集中して臨み、技術面でも精神面においても大きく成長したいと思います。関東学生になり、リーグ戦でレギュラーになることを最終目標とし、まずは技術的な面で自分の短所を直し、得意とするフォアを生かした試合展開ができるようにがんばりたいと思います。精神的な面では、「絶対に勝つ」という気持ちを忘れずに、最後まで戦い通せる強い精神力をつけたいと思います。また、団体では、来年のリーグ戦で絶対に一部に昇格できるよう、皆でがんばっていきたいと思います。

立教大学体育会テニス部女子名簿

学年	学部	学科	役職	氏名	出身校	〒	住所	☎
			副部長	船田　正之		169	新宿区高田馬場4－36－20	03-3368-8103
			監督	広瀬　勝蔵		180	武蔵野市吉祥寺北町1－27－3	0422-22-4000
			コーチ	鈴木　康正		104	中央区佃2－2－10－1709	03-3533-9035
			コーチ	大塚　直人		184	小金井市前原町1－10－20	0423-88-0902
			コーチ	松村　隆司		132	江戸川区東小松川2－26－9－404	03-3674-2751
4	文	日文		吉田　涼	都立立川	207	東大和市立野3－1293－10　グリーンタウン3－210	0425-62-0828
	社	観		星野　薫	山梨学院	114	北区中十条3－31－4　シャンポールサカエ202	03-3900-8099
3	法	法	主将	畠中　暁子	仁愛女子	171	豊島区目白5－28－2　グレース目白201	03-5996-2775
	法	国比	主務	岩本　美幸	常総学院	207-11	我孫子市布佐平和台4－9－15	0471-89-4936
2	法	法		尾又明日香	岡谷南	171	豊島区長崎2－3－11　レジデンス椎名町301	03-3959-2987
	文	教	副務	増田ちえり	立教女学院	177	練馬区石神井台4－1－3－1007	03-3928-5655
	法	法		山崎真由美	高知	174	板橋区常盤台2－16－7－202	050-184-4941
	文	英米		吉田真理子	東葛飾	277	東葛飾郡南町大津ケ丘3－43－18	0471-91-3244
	法	国比		田辺　美穂	香蘭	225	横浜市青葉区市ケ尾町1647－10	045-973-8665
1	文	心理		井口　郁子	成蹊	186	武蔵野市境南町4－10－16	0422-33-2886
	法	国比		太田佳世子	カリタス女子	223	横浜市港北区日吉1－18－9	045-561-1261
	経	営		馬場亜希子	富士見ヶ丘	259-13	秦野市千村653－14	0463-87-5715

立教大学体育会テニス部男子名簿

学年	学部	学科	役職	氏名	出身校	〒	住所	☎
			部長	栗原　謙二		171	豊島区西池袋2－25－10－106	03-3988-5071
			監督	鷲田　典之		177	練馬区下石神井4－10－19－30	03-3995-6060
			コーチ	藤井　孝信		168	杉並区宮前3－31－10－1－147	03-3335-8777
			コーチ	山田　昇		184	小金井市貫井北町3－19－7	0423-83-5609
4	社	産		村木　祐介	立教	183	府中市寿町1－6－3－603	0423-66-4563
	社	産		大熊　隆史	立教	125	葛飾区高砂2－33－14	03-3658-6081
	社	観		岡　利之	立教	184	小金井市東町1－19－11	0423-85-8388
	済	済		里和　勇人	立教	164	中野区東中野2－4－16	03-3365-0683
	社	社		粂田　博史	県立新潟南	351-01	和光市白子3－30－12－101	048-461-7978
	社	観		吉崎　太二	立教	192	八王子市北野台2－29－16	0426-36-6206
	社	観		関　秋鹿	共立女子第二	192	八王子市中野上町4－32－10	0426-22-2976
	社	産		高木香代子	県立新潟高	171	豊島区西池袋2－31－8－102	03-3989-6791
3	社	産	主将	高田健太郎	立教	161	新宿区中落合1－14－29	03-3954-5236
	法	法	主務	大野　潤三	立教	168	杉並区高井戸西1－11－17	03-3331-4009
	済	済	女子マネ	八木　未来	新潟中央	203	東久留米市東本町4－6－503	0424-71-7909
	文	心	女子マネ	山崎貴身江	実践	152	目黒区鷹番1－3－8	03-5704-4226
2	法	法		井口　博之	立教	112	文京区音羽2－2－2－805	03-3942-7128
	社	観		小笠原龍太	東筑	351-01	和光市白子1－26－7	048-467-3410
	社	社	副務	斎藤　征爾	国学院栃木	343	越谷市蒲生愛宕町8－21	0489-87-6717
	社	社		真田　康志	立教	270	松戸市常盤平2－4－7	0473-88-2281
	済	済		和田　憲治	立教	184	小金井市梶野町2－14－7	0422-52-0867
	法	法	女子マネ	石田亜希子		349-01	蓮田市西新宿4－20－3	048-769-8854
	社	社	女子マネ	湯浅　佐智		175	板橋区赤塚3－25－10－205	03-5998-5622
1	経	済		入部　圭介	立教	107	港区南青山7－13－17	03-3499-5071
	文	教		工藤　雅也	立教	111	台東区千束3－19－6	03-3873-7140
	法	法		中村　昌平	立教	181	三鷹市深大寺3－17－6	0422-33-1846
	法	法		藤井　学	立教	133	江戸川区北篠崎1－1－14	03-3678-6510
	法	法	女子マネ	上廣　真紀	県立船橋		千葉市花見川区畑町667－15	043-275-0741
	法	法	女子マネ	針谷　純子	山脇		葛飾区亀有2－32－23	03-3602-0405

平成９年度 年会費
ありがとうございました。

（１２月１日現在）

卒年　ＯＢご氏名　（敬称略）

21　田中　誠
23　清　隆彦
25　五味淳芳　山本　実
26　迫　哲夫
27　岸本駿二　橋本幸信
28　小倉　宏
29　森崎貞男
30　内河　功　向井昌男
31　森　恵
32　改田　雄　鈴木有恒　辻本正司　立花雍一　永山勝三　宮岸　武
33　飯島一雄　川上　岳　藤林勇雄　矢部治道
34　青山　毅　飯郷七朗　井田悦夫　井上隆二　小笠原 潤　小田原正直　金田藤正　瓦林聖児　副島光彦　丸山悌雄
35　青木久雄　河内　進　斉藤俊介　鷲見桂一　高坂英順　竹村郁男　仲井一浩
36　拓殖銑次　日根野一郎　山中博司
37　安部直之　河野貞夫　栗田進伍　小西一三　高橋　洋　鎗田秀雄
38　合瀬武久　近藤紘二　下村直史　田口雅一　西宇明男　西山憲一　橋本　宏　広瀬　武　松波幹忠
39　石黒　潔　伊藤正信　唐沢靖治　笹山隆男　高橋道男　玉置秀雄
40　井上詔夫　末藤朋昭　田口壮治　南部浩史　平井克忠　広瀬省蔵　藤原正勝　町田昭雄
41　大田洋一　川口隆史　木口久仁彦
42　倉光　哲　出口誠之　豊田資朗　昇　文彦　濱野公哉　原田正明
43　有馬八郎　佐藤俊彦　沢松忠幸　三浦允行
44　志田充顕　占野靖宗　須田健治　富田次郎
45　五十嵐哲男　宇野　治　佐藤雄三
46　笠原賢次郎　日高啓吾　宮下好人
47　安達幸男　加藤雄一　富田　均　若井新司
48　内原康雄　清水春海
49　浅見　豊　今井広幸　鈴木　明　鈴木徹雄　武藤憲二　八木澤恭司
50　井畑　清　梅田憲司　大里有二　立野公一　中島幸彦
51　佐藤信夫　鈴木一広
52　石上富一　鈴木　宏
53　井筒浩平　高橋良隆　山下哲夫　鷲田典之
54　秋元英晴　岩立文雄　角野俊平　加倉井 理　久保勝延　鈴木康正　澗田雅之　原田　豊　渡辺　薫
55　大塚直人　金原　厚　松村隆司
56　岸本　誠　竹石敬之　谷口秀治
57　伊藤久幸　坂井邦夫　高橋宏幸　田鍋文啓　平山　元
58　井上勇人　大井洋隆　庄野俊夫　染谷孝幸　竹下喜六　田淵浩史　旗 栄一郎

卒年　ＯＢご氏名　（敬称略）

59　阿部弘行　藤井孝信
60　江川裕雅　笠原康司　沢井清隆　藤原誠之　高橋守種　横山　浩
61　石川　順　大岡史直　佐藤昭一　山田彰彦
62　牛込耕二　柴原公博　辻野廣行
63　上杉　佐　最賀智正　鹿浜哲也　新谷守夫　高山和則
H1　青山貴志
2　昆野　敦　篠崎享史　白寄誠爾　田中周作　東樹秀明　山田　昇　渡辺正和
3　丹司　均　戸田雅道　柳内　崇
4　足立充生　中尾正芳　増田哲也
5　大須賀將徳　片岡　聡　金子　誠　深澤伯亮　保泉　敦
6　相見典祐　後藤　孝　二塚圭介
7　青崎琢弥　太田　治　小俣光司　酒本大輔　曽我石次郎　千葉素久　中川孝博　宮本匡彦
8　河村貴史　出口卓央　保戸塚哲也　松本俊一郎　山崎雄一郎
9　阿部　宏　久々湊仁彦　神藤浩史

卒年　ＯＧご氏名　（敬称略）

36　野田昌子　八木下紗絵子
37　森　聿子
38　松平紀代
39　笹山俊子
40　川上浩子　菅原弘子　深草宣子
41　松田弓子
42　杉沢小百合
43　阿部喜子　片山康子　林田千史
44　石谷こずゑ　星谷久美
45　木本美代子　倉科鈴恵　長浜町子　古庄篤子
47　伊藤美枝子
52　吉川裕子
53　小場喜子　前山真理　福田佐智子　山下実果　吉原典子
54　佐々木恭子　堤 千賀子　戸松まさみ　村田由子
55　黒坂美也子　杉沢　薫　ダン千里　山下節子
57　厚美　緑　大久保直子　坂井裕美
58　森川真実
59　稲田菜穂子　後藤悦子　前田真佐子
60　永田良子　服部敦子　藤原亜美　増沢真弓
62　内山麻里　那須真理子
H1　加藤尚子　岡崎美穂
3　金丸聡子　近藤和子　島田千代
4　坂倉祐子
5　中山洋美
6　吉川明見
7　藤井智子
8　笹川友紀　鈴木麻衣　横田陽子
9　柳　令子

訃報

田中憲之先輩　昭和十四年卒　平成六年二月
片山幸二先輩　昭和二十一年卒　平成六年三月
手塚雅夫先輩　昭和三十三年卒　平成六年八月
南部浩史先輩　昭和四十年卒　平成六年九月
田中富弥先輩　昭和二十三年卒　平成七年五月
山元正治先輩　昭和十四年卒　平成七年九月
大竹　博先輩　昭和二十五年卒　平成九年二月
藤澤陽蔵先輩　昭和六年卒　平成九年六月
小宮山和知先輩　昭和三十二年卒　平成九年七月